

地域の専門家との連携による「免許状更新講習」の展開

～「自然体験活動」を取り入れた授業実践の模索～

佐美俊輔・伊藤輝之

●要約

現在の教育現場では、子どもたちの「体験活動」、「直接体験」や、学校・家庭・地域による「学社連携」の重要性が謳われている。その中で筆者らは、「免許状更新講習」において「自然体験活動」を取り入れた授業実践の模索を行ってきた。

本稿は、筆者らにより2014年度に実施された「北海道だからできる『身近なもの』を活用した授業の創造～『体験活動』を取り入れた授業展開～」の取り組みを総括的に検討、考察することを目的としている。その結果、本講習では大学教員と自然体験学校（民間教育機関）との連携により、それぞれの専門性を生かした理論と実践（ワーク）を組み合わせた教育必要性に応えるプログラムを提供できたと推察される。

●キーワード

自然体験

体験活動

免許状更新講習

民間教育機関

学社連携

はじめに

我が国では、2007年6月の「教育職員免許法」の改正により、2009年4月1日から「教員免許更新制」が導入された。この制度の目的は、「その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すもの」とされる⁽¹⁾。

こうした動向を受ける形で、稚内北星学園大学（以降、「本学」とする）では、2009年度から「免許状更新講習⁽²⁾」を開講している。本稿において注目する「免許状更新講習」は、2014年8月6日に開講された「北海道だからできる『身近なもの』を活用した授業の創造～『体験活動』を取り入れた授業展開～（以下「本講習」とする）」である。本講習は、本学で「健康とスポーツ系」授業を担当している佗美と、北海道宗谷地域における自然体験活動の専門家である伊藤⁽³⁾（本学非常勤講師：ゆうち自然学校代表）との連携により実施されたものである。以下では、本学ホームページに掲載された本講習の概要を提示する。

最近の教育現場では、「豊かな体験活動」の充実（北海道教育委員会）、「ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う『直接体験』」（文部科学省）の重要性が謳われています。本講習では、北海道、とりわけ道北地方に存在する「身近なもの」の活用を目的とした「体験活動」に焦点を当てます。その一例として、「総合的な学習の時間」などの授業における「自然体験活動」の活用法を中心に講習を実施したいと思います。

（稚内北星学園大学「教員免許状更新講習」のホームページより）

上述のように、筆者らが本講習で注目したのは、「直接体験」、「身近なもの」、「体験活動」の活用法である。こうした「体験活動」を重視する風潮は、文部科学大臣からの諮問と中央教育審議会の答申においても見られる。下記では、両者の議論を簡潔に参照する。

2008年4月18日、文部科学大臣から中央教育審議会に対して「新しい時代に求められる青少年教育の在り方について」の諮問が行われた。諮問理由の1つとしては、「青少年の『生きる力』を育む上で、自然体験をはじめ文化・芸術や科学などに直接触れる体験的な学習活動等の重要性が高まる中、適切な指導者、多様な活動プログラムなどの教育資源は不十分な状態にある」ためである。

下記では、この諮問に対する中央教育審議会の答申「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」（2013年1月）の一部を引用する。

- ①保護者の経済力や保護者自身の経験の多寡、学校の判断によって青少年の体験活動の機会に「体験格差」が生じているとの指摘もある。
- ②都市化、少子化、電子メディアの普及、地域とのつながりの希薄化といった社会の変化などにより、これまで身近にあった遊びや体験の場や「本物」を見る機会が少なくなり、そのノウハウも継承されなくなっている。
- ③体験活動は、学力向上の取組と相反するものではないが、学校現場や保護者の間では、学力向上の取組と比べると、体験活動の重要性が必ずしも認識されていないことが多いとの意見もある。また、体験活動の重要性が認識されてはいても、教員は生徒指導上の問題へ

の対応等の様々な課題で忙殺されており、体験活動の機会の確保が十分になされていない現状がある。

- ④社会全体として体験活動を推進していくためには、国や地方公共団体のほか、地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要である。
- ⑤体験活動は人づくりの“原点”であるとの認識の下、未来の社会を担う全ての青少年に、人間的な成長に不可欠な体験を経験させるためには、教育活動の一環として、体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが求められている。

(「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」(2013年1月)より一部引用)

以上のように、子どもたちの「体験活動(生活体験、自然体験など)」の不足は、大きな課題の1つである。同時に上記の子どもたちの体験活動(とりわけ自然体験活動)の不足は、教師をはじめとする「おとな」の側にも問題を抱えている可能性を否定できない。その理由は、3点推察される。第1に上記③にあるように「学力向上の取組と比べると、体験活動の重要性が必ずしも認識されていない」ためである。第2に「教員は生徒指導上の問題への対応等の様々な課題で忙殺されており、体験活動の機会の確保が十分になされていない」ためである。第3に「適切な指導者、多様な活動プログラムなどの教育資源が不十分」であるためである。

上記の答申を踏まえ、筆者らは上述の④、⑤で指摘されている「大学」と「民間教育機関」の連携による「体験活動」、とりわけ「自然体験活動」に注目した講習を企画した。伊藤が代表を務める「ゆうち自然学校」は、2011年に北海道稚内市上勇知にある自然卵養鶏場「カヤニファーム」を主なフィールドとして設立された道北地域で唯一の「自然体験活動を主として展開する民間教育機関」である。ここでは、四季を通じて「自然体験活動」や様々な「体験活動」を提供し、「心底楽しめる場」、「自分らしく心地よく居られる場」、「集まったみんなが共に育ち会える場」の中で、子ども達の健全な発達と、健やかな育児を応援することを目的とされている。

以上のように、教育現場において「体験活動」や「自然体験活動」の重要性が日々増大している現状を踏まれば、現場の教員にはこれらを取り入れた授業、さらには自らの授業と自然とを結びつけた実践が求められている。本講習は、かかる実践的な教育必要性に応えようとする試みである。そこで本稿では、「北海道だからできる『身近なもの』を活用した授業の創造～『体験活動』を取り入れた授業展開～(2014年8月6日実施)」の取り組みについて総括的に検討し、考察することを目的としている。

本講習の特色としては3つある。第1に、筆者らの「自由な発想に基づく授業を展開」した点である。一般的に「自然体験」の代表例としては、「ネイチャーゲーム」などの定型化された環境教育プログラムがあげられる。しかしながら、こうした定型化されたプログラムの実践には、専門の「ライセンス」や「長年の実務経験」が要求される。よって、学校現場で「忙殺」されている教員には不向きである。そのため本講習においては、各教員が「現場で活用できる」点を重視した授業が展開された。第2に「地域の『民間教育機関』と連携」した点である。上述したように伊藤は、「ゆうち自然学校」における活動を本業としている。一方の侘美は、本学において「環境教育」や「自然体験活動」の授

業を担当していない⁽⁴⁾。このようなバックグラウンドの2人による「TT方式」の「免許状更新講習」の実施は、非常にユニークな取り組みであると推察される。第3に、「理論的内容(座学)」と「実践的内容(ワーク)」を組み合わせる点である。このことにより、受講者に「理論と実践」を組み合わせる重要性を「体験的」に学べるように工夫した。

1. 筆者らによる「免許状更新講習」に向けた準備

本講習は、前述したように大学教員(佐美)と、民間教育機関(伊藤)の連携によって実施されたものである。そのため筆者らは、本講習に向けて月に1回程度の定期的な会議や、メールによる意見交換を繰り返した。以下に提示したものは、2014年6月に実施した筆者らの打ち合わせで共有された問題意識である。

- ・文部科学省、北海道教育委員会をはじめ様々な「体験活動」の重要性が指摘されているが、その一方で「確かな学力」への社会的要請も強い。よって、教育現場においては両者の「板挟み」のような状況があるのでは？
- ・多くの現場では、「体験」か「学力」かの二元論に陥りがちなのでは？
- ・「確かな学力」や「生きる力」への期待が高まっている昨今の社会状況からすれば、体験活動は軽視されがちなのでは？
- ・体験活動の多くが、学校行事や職業体験といった実際生活で役に立つプラグマティックなものへとシフトするのではない？ そうすると必然的に「自然」や「自然体験」を軽視する方向にもなりがちなのでは？
- ・現代社会の発展により「人間中心主義」、「科学万能主義」のような錯覚を覚え、我々の中には自然、さらには自然災害までもが「管理できるもの」と認識しているものも少なくないのでは？
- ・(レイチェル・カーソンも指摘しているが)「自然を感じる」ことは、子どもの教育を考える上で欠かすことのできない要素では？
- ・現代の子どもたち、とくに北海道稚内市周辺の場合は、「遊び(≒外遊び)」の経験がきわめて乏しいのでは？

このような状況を鑑みるならば、本講習において筆者らが提供しなければいけないのは、「授業時間の切迫している学校現場で、自然体験の重要性を盛り込めるような知恵、考え方」を提供することである。筆者間では、決して多くの知識、資格を取得する大がかりなものではなく、「ひと工夫」すれば授業に取り入れられるような情報の提供が必要であるとの合意がなされた。そこで本講習の目的は、受講者(各教員)が勤務先の学校において「体験活動」や「自然」を各教科、授業の中で取り入れられるような情報の提供を目指すこととした。

さらに筆者らは2つの到達目標を定めた。1つ目は、自然体験活動の重要性、面白さを体験させるとともに、「9教科すべて」において「自然」を対象とした教育(授業)ができる可能性があることを

伝えることである。2つ目は、「自然＝理科」というステレオ・タイプな認識から脱却し、教科間の垣根を越えた「自然とのかかわりかた」の情報や、その基礎的な考え方を提供することとした。

こうした定期的な意見交換を踏まえて、下記のような講習を計画した(表1)。さらに本講習専用の「教科書」を侘美が中心となって作成し、受講者に当日配布した(資料1)。

表1. 本講習における時間割と担当者

	項目	主担当
9:00 ~ 9:20	ガイダンス ⁽⁵⁾	侘美
9:20 ~ 10:40	①グループワーク (アイズブレイク含)	侘美 (伊藤)
(10:40~10:50)	休憩	
10:50~12:00	②体験活動の現在地	侘美
	③自然体験活動とは?	侘美
(12:00~13:00)	休憩 (昼食) + 着替えの指示	
13:00~13:35	④ゆうち自然学校における「自然体験活動」	伊藤
13:35~14:45	⑤室内 (教室) でできる自然体験活動	伊藤 (侘美)
(14:45~15:00)	休憩・移動	
15:00~16:30	⑥屋外 (広場) でできる自然体験活動	伊藤 (侘美)
(16:30~16:45)	休憩・移動	
16:45~17:00	⑦自然体験活動のまとめ	侘美
17:00~18:00	試験	侘美・伊藤

2. 本講習の各講義における実施内容

本章では、前章の議論を踏まえて計画された「各講義がどのように行われたのか」、さらに筆者らが「どのような思いを込めて実施したのか」を6節に分けて概要を提示する。各講義の担当者は、前章(表1)の通りである。

なお、本講習の受講者は、29名(男性:12名、女性:17名)であった。勤務先は28名が教員であり(幼稚園、こども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、養護教諭)、残りの1名は専業主婦(元幼稚園教諭)である。また受講者の勤務地は、28名が道内であり、1名が道外であった。

2-1. グループワークの実施

本講習の「グループワーク」では、3つのことを実施した。ここでは、本講習における「導入」部分であることから、「受講者同士の交流を円滑に促すためのワーク」を多く取り入れた。授業の進行は侘美が行い、伊藤はファシリテーターとして各グループの助言にあたった。

1つ目は、受講者個人で「A4用紙に皆さんが思いつく『木の絵』を描いてください」という課題を提示した。同時に「木の絵に込めた思い」についても考えさせた。この課題は、第3章で記載する「試験」の1つと連動するものであった。しかしながら、この点について受講者にはあえて説明しなかった。そのため「なぜ?」、「どうして木の絵を?」と疑問を持つ受講者も少なくなかった。多くの受講者は、簡単に、かつ短時間で描いていた(図1)。



図1. 受講生に多く見られたクリスマスツリーを連想させる絵

2つ目は、簡単な「アイスブレイク」を実施した。はじめに6グループに分け(1グループ4~5名)、簡単な自己紹介をさせた。その際には、先ほど描いた「木の絵に込めた自分の思い」についても語らせた。その後の「アイスブレイク」では、グループ内で「自分の誕生月の自然」に関する情報を出し合いながら、「4月から順番に時計回りに座り直すワーク」を実施した。このワークでは、「時期を直接明示する言葉」、「自然と書変わりのない言葉」などを「NGワード」として使用を禁止した。その後、グループ内で「答えあわせ」を行い、誕生日の早いものから「1番」、「2番」…「5番」と順番をつけた。

3つ目は、KJ法を利用した「ラベルワーク」を実施した(図2)。本講習におけるラベルワークでは、4つの課題を実施した。課題は「①自然と聞いて何を連想するか」、「②ご自身の授業の中で『自然』をどのように取り入れているのか」、「③みなさんは小中学校時代にどのような『遊び』や『外遊び』を実施していたか」、「今の子どもと教員世代を比較して、優れているところや劣っているところを議論せよ」の4つであった。各課題では、グループ内での議論の時間を10分間、その後(各グループの)代表者に発表してもらい、全体で意見共有する時間を設けた(図3)。「ラベルワーク」の際には先のアイスブレイクで使用した番号を利用し、侘美が「1番さんは司会」、「3番さんが書記」、「5番さんが発表」という形で役割を指示した。

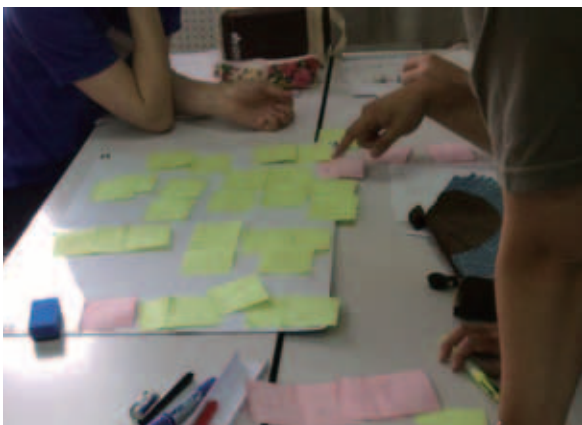


図2. ラベルワークに取り組む受講者たち

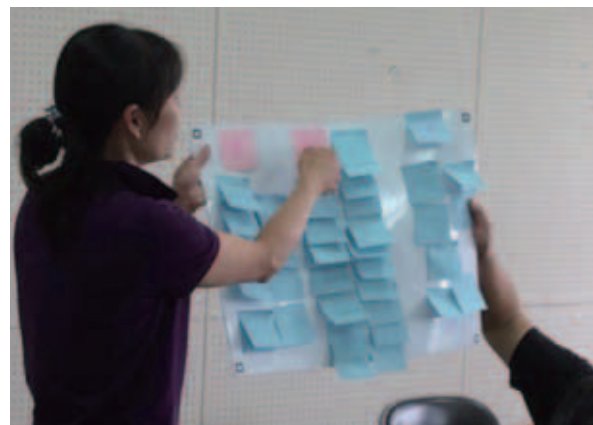


図3. ラベルワークの発表を行う受講者

2-2. 体験活動の現在地

本講習の「体験活動の現時点」では、スライドを使用した講義が行われた。本講義における論点は、「なぜ『自然体験活動』が学校教育で必要なのか？」であった。授業は4つのテーマをもとに構成された。

第1に、文部科学省による「自然体験活動」の位置づけについて紹介した。文部科学省によると自然体験活動とは、「自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的にはキャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動⁽⁶⁾」である。よって多くの学校で取り入れられている「スキー」、「キャンプ」や「ハイキング」なども「自然体験活動」であることを説明した。さらにこうした活動の多くは「定型化されたプログラム」であるが、本講習で目指す自然体験活動は自由度の高いものを志向している点を付言した。

次に文部科学省の答申における「自然体験」の位置づけを時系列で紹介した。本講習において注目した「体験活動の不足」については、近年新たに議論されているような風潮がある。しかしながら実際には、1986年の臨時教育審議会の第2次答申にある「青少年期については、成長に応じて様々な生活体験が、社会の変化に伴って少なくなっている。このため、遊びや地域社会が持っている意図しない日常的な教育役割の重要性を再認識し、自然に接する機会の拡大・・・(略)・・・により、地域の教育力の活性化を図る」の中で指摘されていた。さらに「ゆとり教育」として賛否両論のある「生きる力」が導入された1996年の改訂の際にも、「『生きる力』は、単に学校だけで育成されるものでなく、学校・家庭・地域社会におけるバランスのとれた教育を通してはぐくまれる。特に、家庭や地域社会における豊富な生活体験、社会体験や自然体験は重要である」とされていた。最後に、2011年に制定された現行の学習指導要領において、様々な対象、教科の中で体験活動の重要性が強調されている点を強調した。こうした文部科学省、中央教育審議会の答申の解説の際には、単に「学校教育」に関連する部分にとどまらず、「生涯学習」や「社会教育」の議論についても紹介するように配慮した。

第2に、最近の子どもたちの現状として、なぜ「体験活動」の不足が言われるようになったのか、その点について講義を行った。とりわけ講義において強調したのはジャン・ジャック・ルソー(=今野一雄訳、1962)の『エミール』である。ルソーの著作を紹介する中で、彼の主張は、人間の「自然性」への着目であることを解説した。その上で、今日盛んに議論されている子どもの「スマートフォン」、「オンラインゲーム」、「SNS」などをめぐるトラブルの元凶は、「すべて大人が作り出している」点について強調した。ここでの眼目は、大人が作り出したものに「依存」している子どもたちには、「遊び」の中で身に着けるコミュニケーション能力、主体性、好奇心などが育たないのではないか、という筆者らの共通理解に基づくものである。

第3に、「『自然』とは何か」という点について、環境教育のパイオニアの一人であるレイチェル・カーソンの議論の中から「体験活動」の中でも、とりわけ「自然」、「自然体験」にこだわる革新的な部分を紹介した。レイチェル・カーソン(=上達恵子訳、1996)の『センス・オブ・ワンダー』の中では、「この感性はやがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対するかわらぬ解毒剤になる」、「わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつ

ひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです」という主張について自然体験に引き付けた解説を行った。

さらにここでは、私たちが当たり前に「自然」を「しぜん」と読む点について、疑問を投げかけた。日本では、古より「じねん(自然)」と読む慣習があり、それが明治以降に「Nature」の翻訳語として「自然(しぜん)」という言葉が充てられた点を強調した。日本的な「自然(しぜん)」と、欧米人の「自然」との間に共通点や相違点が見られる点を強調した。特に「主体」や「客体」といった概念が多くの日本人にとって馴染みの薄い部分が見られるのに対し、欧米ではSVOの英文法に見られるように区別を明確にしている点を強調した。

最後に『『自然体験活動』とは?』という問いに対し、筆者らの解を提示した。1つは、文部科学省などの定義にもみられる「自然の中で何かの活動体験をする」という点であり、こうした理解は従来の学校教育の中でも見られるステレオタイプな理解である。もう1つは、「自然環境そのものに触れ、五感で感じ、自然と人とのかかわりを学習する方法」という理解である。筆者らは、自然体験や自然に触れることは生きていくうえで1つの手段に過ぎない、と考える。その中で「自己(主体)」と「自然(客体)」との統一的に理解し、人間と自然とが繋がっていることを実感的に学ぶ必要性こそ「体験活動」に込められた本当の意義であるとの見解を提示した。

2-3. ゆうち自然学校における自然体験活動

ゆうち自然学校は、稚内市上勇知にある自然卵養鶏場「カヤニファーム」を主なフィールドに、四季を通じて「自然体験活動」や様々な「体験活動」を提供し、「心底楽しめる場」、「自分らしく心地よく居られる場」、「集まったみんなが共に育ち会える場」の中で、子ども達の健全な発達と健やかな育児を応援することを目的として設立された(図4)。本講義では、2つのテーマをもとに構成された。



図4. ゆうち自然学校の風景(講義スライドより)

第1に、伊藤が「ゆうち自然学校」を主宰するにあたっての理念、設立目的、基本方針について述べた。ゆうち自然学校のユニークであると考えられる点は、その基本方針にある。

＜ゆうち自然学校の基本方針＞

- ・四季を通じて、自然の中で、仲間と調和しながら思い切り遊ぶことを大前提にしている。
- ・安心できる、居心地の良い、自分らしさを出せる空間を作る。
- ・危険なことだけではなく、服装（寒暖調整、汚れ・濡れ）や装備（何が必要か）、飲食（食事の量や水分補給）など身の回りのこと全般について、自分のことは自分で守る。
- ・できる限りの指示や禁止を排し、自由な雰囲気の中で、やりたい遊びの実現を目指す。

特に受講者にとって驚きの反応が見られたのは、「できる限りの指示や禁止を排し、自由な雰囲気の中で、やりたい遊びの実現を目指す」であった（図5）。授業やホームルームなど学級経営、児童・生徒の管理をする受講者にとっては、「できる限りの指示や禁止を排する」という筆者の方針に違和感を覚えたものも少なくないと推察される。しかしながら実際は、何もかもが自由な訳ではなく、環境・物質・人間関係など様々に制限された中での活動になる。これらの活動を通して、自分から何かをしようという気持ちや社会の中で調和していくこと、成功や失敗、様々な感情、自然に対する思いなどをたっぷり経験し、生きていく上で土台となる心や体を育むことを目指している。また、これらの活動を通して「自己肯定感（自尊感情）」を育むことも重要視している。主な活動としては、以下の3つである。「親子の自然遊び＝『ともとも（通年・月例・日帰り）』」、「子どものための野遊び空間＝『ノビトくらぶ（通年・月例の1泊と長期休みの2泊）』」、「川遊びスクール＝『リバーキッズ（夏期限定・日帰り）と夏休みの1泊』」である。



図5. 草原で犬と共に自由に走りまわる子どもたち（講義スライドより）

第2に、ゆうち自然学校の実践から見えた「自然体験活動の意義」について述べた。ここでは、「参加者の3つの変化」から解説が行われた。第1に、事前に活動イメージが膨らむ、その季節にできる「遊び」を事前に自主的に考えられる、その準備ができるようになる、野外での身のこなし、危険への意識付けが身に付くことなどである。第2に、ゆうち自然学校の一体感の中で過ごすことにより、小学校・学年・性別に関係なく仲間意識が芽生え、イベントでの再会を楽しむようになるなどの変化が見られた。第3に「親子で体験する活動」では、日常生活ではできない自然遊びを通して、親子が楽しく過ごせる時間を持てる。楽しさを共有することにより、親子の絆を深める助けになることや、日常

では見られない新たな一面を発見したり、自然の中で過ごすことの良さを再認識する機会へとつながる可能性があることを解説した。

2-4. 室内（教室）のできる自然体験活動（実技）

本講習の「室内のできる自然体験活動」は、「地球の水はどこにあるの？」をテーマに構成された。この講義では、私たちの「身近なもの」の1つである「水」に焦点を当てた。「水がどこから来るか」などのワークを通じて地球上の循環（つながり）について学び、水について考えるきっかけを与えることを目的とした。なおこの講義では、伊藤が資格を保持している「プロジェクト・WET（公益財団法人河川財団）」のワークを部分的に紹介した。

導入部分では、「利き水クイズ」を実施した。水道水、ミネラルウォーター（国内）、ミネラルウォーター（海外）の3種類の水を飲み比べ、どの水が一番おいしかったかを尋ねた。さらに4択の「水クイズ」を出題し、地球上の水に関してゲーム性を持ちながら学んでもらった。具体的には「地球上の水が占める割合」、「地球上のどこに水が多く存在しているのか？」や「私たちの『飲み水』が地球上でどの世程度の割合なのか？」などのクイズを出題した。その後、プロジェクト・WETの「水の旅⁽⁷⁾」を体験させた（図6）。最後に、地球上の水分布についての解説、各個人での「ふりかえり」の時間を設けた。このプログラムを体験した教員の学び（＝「ふりかえりシート」）については、第3章で提示する。



図6. プロジェクト・WET「水の旅」の様子

2-5. 屋外（広場）のできる自然体験活動

屋外での自然体験活動は、2つ実施した。この授業は、受講者が現場において短時間でも授業に組み込んだ形でワークを行えるように、本学周辺の自然環境（身近なもの）を利用して行われた。

第1に、「五感を活用したワーク」である。はじめに、耳を閉じて「何の音が聞こえるか？」という簡単なゲームを実施した。その後、自分の身に着けているものの中から一色を選択し、それと同じ色の自然物を探す「色探しゲーム」を実施した（図7）。その後、「手」の触覚を使用する（袋の中に隠された「葉」と同じものを身近な環境から探しあて採取する）「葉探しゲーム」や、身近な環境から採取した葉の「臭い」の違いを感じてもらう「臭い比べゲーム」を実施した。



図7. 本校の近くで「色探しゲーム」を実施しているところ

第2に、「木と触れ合う」ワークを実施した。この授業はペアで行った。このワークは、一人がアイマスク（目隠し）をし、もう一人が（50本近くある木の中から）自分の好きな木まで誘導し、目隠しをしたまま木に触れさせた（図8）。目隠しをされていた側は、アイマスクを外し、自分の触れた木がどの木であったのかを当てさせた。受講者には「誘導役」、「目隠しをされる役」の双方体験してもらった。受講者の中には誘導の際に相手を回転させたり、わざと遠回りをしたりする者もあり、終始笑いの絶えない雰囲気で行われた。このワークが終了後には、すべての受講者が目隠しを外し、自分の好きな木のところへ行き、触れたり、話しかけたり、観察したり・・・自由に過ごす時間を設けた。



図8. 「木と触れ合う」のワークを実施しているところ

2-6. まとめ

本講習の最終講義である「まとめ」の授業においては、「自然体験活動」にはどのような「可能性」があるのか、今後の展望を述べた。本講義は3つのテーマから構成された。

第1に「自然体験活動への期待」では、「教育（環境教育）としての自然体験活動」の重要性が述べた。その中でも「体験活動」は、「知識・理解」と「行動」を媒介する点において重要である。しかしながら、ここで注意しなければいけない点は、定型化された教育、プログラム型の教育が陥りやすい「普及・啓発」のレベルに止まり、行動に結びつかない点を克服する必要がある。ゆえに「体験学習」を通して「学ぶことを学ぶ」必要性、さらには、「神経系」が幼少期～小学校低学年に完成することを指摘

したスキヤモンの「発育発達曲線」の視点、発達心理学の視点からも「体験活動」は重要であると考えられる。

第2に、「北海道らしさ」とは何かについて述べた。北海道には多種多様な「第1次産業」、北海道にのみ生息する生物、自然を活用したアクティビティや、自然を産業、ガイド、NPOの多様性があげられる。そして、最も北海道らしいものの1つは、「根雪^⑧」である。このような季節の特徴をどのように活用するのか、先人たちがどのように「冬」と向き合ってきたのかを検証してみる必要があると考えられる。各地域には、自然と生活との密接な結びつきによる「地域文化」が積み重ねられており、こうした地域の歴史にも目を向けてみる必要があると推察される。

最後に、「これからの教育現場で求められること」について述べた。筆者らの主張の1つは、「学力」・「体験活動」という二元論ではなく、その相互作用に目を向けるべきである。同時に「体験活動」を通した子どもによる「主体的な学び」を取り戻す必要性もあると考えられる。こうしたことを可能にするためには、学校を中心とした「家庭・地域」との連携による「体験活動」の確保が重要である。

3. 本講習を通した学びと受講者からの評価

前章では、筆者らが実施した各講義内容を解説した。本章では、筆者らの実施した各講義が、受講者である現場の教員たちにどのように受け止められたのか、彼・彼女らが学んだ内容、感想を4節に分けて提示する。

3-1. ふりかえりシートから

本節では、本講習の「室内で出来る体験活動(=地球の水はどこにあるの?)」において「ふりかえりシート」を使用した。シートは、授業の感想、わかったこと、気づきの3点を自由に記述できるものである。下記では、受講者の記載した「ふりかえりシート」の内容を整理し、4つに分けてその内容を提示する(受講者によるシートのすべての内容は「資料2」として提示)。

- ①「身近なもの」を授業の教材として使用するためには、教師の側が準備を「工夫」して活用すること
- ②知識と体験(身体や五感の使用)を組み合わせることの重要性を改めて学んだこと
- ③「クイズ」や「ゲーム」などを取り入れると授業が楽しくなること
- ④子どもたちの「好奇心」や「疑問」は、「体験」や「楽しい活動」の中から湧き出ること

上述の4つに入らない解答としては、「ゆうち自然学校への興味・関心」や、「受講者自身が子ども時代に体験した記憶を思い出した」などと記載している受講者もいた。

本講習の受講者は、幼稚園～高校の教員が多数であり、担当教科も異なる。しかしながら、受講者の多くは、自分の担当教科で「体験」や「自然」を組み込む「工夫」をすることで、子どもたちの「学習意欲」や「主体性」を引き出せる可能性を見出していた。

3-2. 試験結果から

本講習の試験では2つの問題を出題した。1つは、「あなたが実際の授業でどのように『自然』や『体験』を組み込むか」という論述式の課題であり、もう1つは、「(1時間目と同様に) A 4用紙に『木の絵』をもう一度書いてください」という課題を出題した。

3-2-1. 受講者による授業案

本項では、本講習の「試験」で実施した試験問題、「あなたが実際の授業でどのように「自然」や「体験」を組み込むか」の内容を6つに分け、下記に提示する(授業案は「資料3」として提示)。

- ①理学的内容(生物、気候)における活用
- ②言語的教科(国語、英語)における活用
- ③社会的内容(生活科、社会科、ビジネス(商業化))における活用
- ④地域の人材、専門家の授業における活用
- ⑤学級経営、学校行事におけるグループワーク、アイスブレイクなどの活用
- ⑥「遊び」、「散歩」の中での活用(主に幼稚園教諭)

これ以外にも自分の子どもを持つ参加者からは、母親の視点で「体験」や「自然」と触れ合うことの重要性を感じているものもいた。

一般的に「自然」、「自然体験」という言葉から連想されるものは、①で提示した「理学的内容」が多いと推察される。しかしながら、受講者は、筆者らの講習により「自然」を広い視野で捉える、「工夫」を行うことで「9教科」、さらには「学級経営」など幅広い分野で活用できることを理解したものと推察される。また、「主体」と「客体」、「自己」と「他者」の相互理解へつながる可能性を提示したことにより、自然や体験活動が児童・生徒のコミュニケーション手段としても有用であると理解したのではないかと推察される。

3-2-2. 受講者による「木の絵」の変化

本項では、本講習のもう1つの「試験」である「もう一度、木の絵を描いてください」の絵を提示した。試験終了後、まずは「ご自身の絵を朝(1時間目)と比較してみてください」と発問した(図9、10)。



図9. 受講者Aによる絵の変化(左が1時間目、右が試験時間)



図10. 受講者Bによる絵の変化（左が1時間目、右が試験時間）

その後、1時間目（＝グループワーク）のグループで再度集ってもらい「どの人が朝と今で絵が一番変化しましたか」と発問した。その上で「朝と今とで一番変化した人は、黒板の前でプレゼンテーションをしてください」という課題を提示した。

そのうちの1人の受講者Aは、「朝はいきなり（木を描きなさい）言われて描く気がしなかったけど、一日中ずっと木と触れたり、見つめたり、自然体験のワークをすることで木の絵を描きたくなりました」と述べていた（図11）。



図11. 授業冒頭と試験時間との間に絵が変化した受講者Aによるプレゼンテーション風景

こうした結果は、受講者が筆者らの企画した自然体験や体験活動の「理論的内容」、そして「実践的なワーク」を組み合わせたプログラムを「体験」したことで、木の認識が大きく変容したこと、さらに「体験」することの重要性が理解されたと推察される。個人差はあるもの、1時間目の絵と試験で描かれた絵は、大きく異なっていた。とりわけ、1時間目に描かれた絵は「クリスマスツリー」や、木の幹、枝、葉の関係性が不明確なものが多かった。また多くの受講生が非常に短時間に書き上げていた。一方、試験で描かれた絵は、木の枝、幹の表面、肌触りなどを反映した絵が多く見られた。いずれの受講者においても、1時間目と絵の内容が大きく変化したことは、視角的、内面的にも明らかであった。

3-3. 受講者からの評価

本講習では、授業の最後に①講習内容の面白い点、②講習内容への意見、③講習以外の事務手続きや、感想についての「フォローアップアンケート」を実施した（資料4）。そこで受講者から得られた回答を下記に提示する。

<授業終了後の受講者からのアンケート結果>

- ・グループワークや体験活動が取り入れられており、集中力がとぎれず受講することができた。内容もとてもよかった。
- ・体験ができたということ。これで、今回この講習を受けました。
- ・実際に体験活動を経験できたこと。
- ・体験学習は知識と体験の組み合わせの大切さを学んだ。現場で実践したい。
- ・「身近なもの」を活用した授業の創造の講習は、すぐ保育に使っていけそうだと思います。「水の流れ」や身近にある草木の観察など
- ・自然との関わりを生徒に伝えるためのヒントを教えてもらい参考になった。
- ・木に触れ、語り合うことで絵も変わる。子どもたちに絵を描かせるときに取り入れてみたいです。
- ・体験あり、活動ありで、頭だけでなく体にしっかりと内容が残りました。実践のヒントになることもたくさんありました。
- ・体験学習を行っている経験者の話が今後の参考となりました。
- ・自然の面白さ、良さを改めて感じる・考えることができたという感じです。
- ・外での活動ができたことと木と友達になれたことが良かったです。恐竜が飲んだかもしれない水、飲みたかったです。
- ・授業の幅が広がった。
- ・現場で使えるネタがいっぱいありました。
- ・経験も積んだこともありますがやっと理論を理解できる年となりどの講習も新しい知を得るかのように充実した内容でした。本当に感謝しております。その中でも自分が初めて知った実践、今まで無知だった分野は特に有意義なものとなりました。体験のある内容で受講者と本音で話し合えた場面、どれも自分にとって有意義な時間となりました。

以上のように、筆者らが本講習において目的とした「体験」や「身近なもの」や「自然」の授業における活用、「すぐに使える」といったキーワードが受講生にも浸透していたことが推察される。また本講習で実施した「ラベルワーク」のようなグループワークを実施することで、教員相互の学びを深められたことも好評価につながったものと推察される。

おわりに

本稿では、「北海道だからできる『身近なもの』を活用した授業の創造～『体験活動』を取り入れた授業展開～(2014年8月6日実施)」の取り組みについて総括的に検討し、考察することを目的としていた。

文部科学省、中央教育審議会、さらには教育学、環境教育学の議論を参照すると、今後「自然体験」や「体験活動」への期待は、ますます高まると推察される。本講習では、「理論的な内容」と「実践的なワーク」を組み合わせ、それを受講者に「体験的に」理解させ、勤務先の学校において「体験活

動」や「自然」を各教科、授業の中で取り入れられるような情報の提供を目指していた。結果として、筆者らが掲げた目的は、受講者のワークシート、授業案や、授業評価アンケートの結果などから一定の成果をあげたと結論付けてよいであろう。

また、本講習の特色の1つは、大学教員（佐美）と、地域の自然体験活動の専門家（伊藤）が連携した点にある。筆者らは、文部科学省が指摘しているように「社会全体として体験活動を推進していくためには、国や地方公共団体のほか、地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要」と考える。実際に本学では、伊藤との「生涯学習概論Ⅱ（社会教育主事任用資格必修科目）」や「スポーツⅠ（教員免許資格選択必修）」の授業において連携している。多くの学生は、「子どもの教育」から「学校」をイメージする。その中で伊藤の実践している「教育」や「自然体験活動」を授業で紹介することは、学生に「多様な教育」のイメージを形成することに貢献していると考えられる。その後、大学の授業で興味をもった学生は、インターンシップやボランティアなどの課外活動で実際に「ゆうち自然学校」の教育を体験し、学びを深めている。

ここで本稿の限界と今後の展望を述べておきたい。本稿は、授業のプログラムの内容を中心に総合的に検討した。それゆえ理論的、質的な分析における方法論的な詰め甘さは否めない。また「講習」として時間の制約を受ける性質上、実施した内容の一部は定型化されたプログラムを使用した。そのため本講習では、受講者による創造性、自由に考える機会を保障する時間が少なかった。

最後に本稿の今後の展望について述べたい。今後の展望は3つある。第1に、筆者らは「遊び」と「授業」の結びつきの探求である。天野秀昭による「プレーパーク⁹⁾」の実践に見られるように、「遊び」、「身体」、「自然」などが有機的に連関する事例について、体育学の見地から再検討する必要がある。さらにこうした「遊び」取り入れた授業をすべての教科（教員）に還元する方法を模索していきたい。

第2に、今回筆者らが実施した講習内容について、より方法論的に厳密な質的研究を行い、環境教育や教育学の議論との理論的な擦りあわせも検討課題である。本稿では授業プログラムの紹介にとどまっており、講習内容の実践的、理論的な内容についても再検討する必要があると考えられる。

第3に、大きなテーマであるが「体験」を重視する教育学的風潮を再度検証してみる必要があると考えられる。今回の実践のように「体験」を通じた学びが、「確かな学力」へとつながることは理論的、経験的にも十分説得力がある。しかしながら、このような「体験」重視では、抽象的思考や、（宇宙空間のように）体験が極めて難しい状況を想定しなければならない思考を理解できなくなる恐れがある。こうした体験重視と抽象的思考とのバランスについても検証してみる必要がある。

以上3つを今後の課題とし、本稿を結ぶ。

●註

(1) 文部科学省ホームページより

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/001/1316077.htm

この制度の施行により、対象の教員には「原則的に、有効期間満了日（修了確認期限）の2年2ヶ月から2ヶ月前までの2年間に、大学などが開設する30時間以上の免許状更新講習を受講・修了した後、免許管理者（都道府県教育委員会）に申請する」ことが求められる

(2) 本学では「教員免許状更新講習」と呼称している。文部科学省による「免許更新講習」と同義である。下記は、

本学の「教員免許状更新講習」のホームページである。

<http://www.wakhok.ac.jp/kyouinmenkyo201408.html>

- (3) 伊藤の自然体験関連の保有資格は下記の通りある。
- ・CORN（自然体験活動推進協議会）／コーディネーター
 - ・プロジェクト・ワイルド（一般財団法人公園財団）／エデュケーター
 - ・プロジェクト・WET（公益財団法人河川財団）／エデュケーター
 - ・プロジェクト・ラーニング・ツリー（特定非営利活動法人国際理解教育センター）／リーダー
 - ・GEMS（ジャパン GEMS センター）／リーダー
 - ・小学校長期自然体験活動指導者養成（文部科学省青少年課）／全体指導者
- (4) 侘美は主に、社会教育主事資格、スポーツ実技などを担当している。
詳しくは、本学のシラバスで担当科目をご確認されたい。
<http://www.wakhok.ac.jp/2014/syllabus2014.html>
- (5) 冒頭のガイダンスについては、本講習の時間や諸注意などの事務的な連絡を行った。よって、この中では「自然体験」に関する内容は一切話していない。よって本講習からは独立した位置づけであるため、内容は省略する。
- (6) 文部科学省 青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議から「自然体験活動の定義」を引用 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm
- (7) 「水の旅」、プロジェクト・WETの一部である。本プログラムは、立方体（≒サイコロ状のもの）を使用しながら地球上の水循環を学ぶプログラムである。海、空、地下水などの「島」を作り、その自分の好きな地点で立方体を振る。次に、立方体の目の出た次の「島」へ移動する。この立方体は、1/6ずつに均等に割り振られておらず、地球上で一番の水面積占める「海」の目が出やすい仕掛けとなっている。
- (8) 「根雪」とは、雪が降り積もったあと、春まで融けずに残る雪のことである。稚内では12～3月の間は、路面や歩道がほぼ雪に覆われ、溶けることがない。
- (9) 天野秀昭による東京都世田谷区における「プレーパーク」の事例が有名である。

●参考文献

- 天野秀昭、2011、『よみがえる子どもの輝く笑顔』、すばる舎。
- 降旗信一、朝岡幸彦、2006、『自然体験学習論～豊かな自然体験学習と子どもの未来』、高文堂出版。
- 降旗信一、高橋正弘編著 阿部治、朝岡幸彦監修、2009、『持続可能な社会のための環境教育シリーズ（1）「現代環境教育入門」』、筑波書房。
- I. イリッチ著、東洋、小澤周三訳、1977、『脱学校の社会』、東京創元社。
- ジャン・ジャック・ルソー、今野一雄訳、1962、『エミール（上・中・下）』、岩波文庫。
- 小玉敏也、福井知紀編著 阿部治、朝岡幸彦監修、2010、『持続可能な社会のための環境教育シリーズ（3）「学校環境教育論」』、筑波書房。
- 南里悦史、上野景三、井上豊久、緒方泉編著、2010、『子どもの生活体験学習をデザインする』、光生館。
- 文部科学省中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」（2013年1月）
www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/.../04/.../1330231_01.pdf
- 日本環境教育学会編、2012、『環境教育』、教育出版。
- レイチェル・カーソン、上遠恵子訳、1996、『センス・オブ・ワンダー』、新潮社。
- 佐藤修一、1998、『自然にひそむ数学－自然と数学の不思議な関係』、講談社。
- 柳父章、1977、『翻訳の思想－「自然」とNATURE』、平凡社選書。

●謝 辞

2014年度免許状更新講習「北海道だからできる『身近なもの』を活用した授業の創造～『体験活動』を取り入れた授業展開～」にご参加頂いた皆様のご協力、取り組みに感謝いたします。

【資料1】本講習におけるテキスト

2014年度 夏期
教員免許状更新講習

北海道だからできる「身近なもの」を活用した授業の創造
～「体験活動」を取り入れた授業展開～

2014年8月6日

講師 侘美俊輔 / 伊藤輝之

講習テキスト：侘美俊輔・伊藤輝之 著

1. はじめに（侘美）
2. 「体験活動」の現在地（侘美）
3. 「ゆうち自然学校」における自然体験活動（伊藤）
4. まとめ ～「自然」・「自然体験活動」を取り入れた授業展開の可能性～（侘美）

【資料2】 受講者による「ふりかえりシート」(感想、わかったこと、気付いたこと)

- ・もともと身近な存在である水、それをもっと身近にそして貴重なものとして感じられた活動だった。
- ・野外に出ていく時間がなかなか無くてもこのような「工夫」をすれば、子どもたちに自然を感じさせたり、考え合ったりできたのはとてもうれしいヒントになった。
- ・数字を見せられただけではなかなか実感できない水の量を楽しく動き回るなかで感じることができました。体験の中から得る知識ってきっと忘れないんじゃないかなと思いました。
- ・「水」1つとっても学ぶべき材料がたくさんあること、自然は子どもたちの「学びたい」欲求を引き出すものであること、そこから更に自主的に学ぼうとなること。
- ・授業者の視点、仕掛け1つで、多様な学びの形があることを改めて実感しました。「楽しい」と思えることが、もっと「勉強したい」を支えるんだなあと思います。もっと子どもたちが「学びたい」と思うような授業づくりを考えてみたいです。
- ・いくら詳しく話をしてもわかりづらい、そんな難しい題材にこそ体験学習を取り入れていけたらなと思いました。自分の頭で考え、動き、学んだことは心の中に残るし、情報を与えられてばかりいる状況よりもずっと楽しいことを学びました。「なぜ、どうして」の知的好奇心は体験でこそ体得できる小物なのだと思います。教師がすべてを教えるのではなく、問題提起し、子どもたちの意見を聞き、見守り、導く、教師側の技術もとても必要だと思いました。
- ・子どもたちに「水の出しっぱなし」を注意しているが、水のクイズや、水の旅のようにやってみるその意味が分かり、自分たちも水を大切にしていこうとなっていくんだと、言葉だけで伝えていた自分をちょっと反省しました。
- ・ゆうち自然学校の話聞いてとても興味がわき、もっとたくさん話を聞いてみたいと思いました。
- ・環境や条件を整えれば、子どもたちは上手く自然を活用して遊びを想像できるものだと感じた。
- ・今の子どもたちは、机上の知識は豊富だが、体験や経験に乏しい。それだけに体験活動の大切さを感じた。
- ・ゆうち自然学校というところがあるのを転勤した次の学校の生徒から聞きました。「学校がすごく楽しい、また行ってみたい」という子どもたちの声を多く聞いた理由がよくわかりました。あらためて自然体験の良さを感じました。
- ・自分も子供のころ、楽しいながら、体験しながら学んだこととはずっと覚えていると改めて思い出すことができました。活用させていただきます。
- ・頭を使って、体を使って、そしてまとめて“ふりかえる”という一連の流れが意外と授業の中で生かされていないのかも…と、自分の授業を振り返るきっかけになりました。
- ・大人になってからできるようになるには時間は書かかるけど「楽しい」、そして「自分にプラス」になるということが一番の喜びです。
- ・授業にクイズや活動を入れることも最後まで興味を失わせない、とても有効な手段だったと思います。子どもたちに興味を持ってもらい、その上で伝えたいことを伝えていくことが大切です。
- ・自然体験についてもおぼろげながら感じていたことを、しっかり言語化していただけたのでスッキリしました。
- ・2学期には水、川の授業があるので、まずは「利き水」から始めようと思う。

- ・体験学習楽しくてわかりやすく、とてもよかったです。学校でぜひ子供たちと一緒にやってみたいですね。
- ・地球全体のことでも、今日のように工夫すれば楽しく学べるということがわかってよかったです。
- ・結局、水を育むのは健康な地球なので、自然環境の保護ってというのは、人間を守ることにつながるということをもっと広めていく必要性を感じた。
- ・子供たちに「%」で教えても「・・・(無言)」なので、こういった活動の重要性を感じました。
- ・やはり学びの理解は「体験」からすべてが始まり、その体験する中で疑問を解決する手段が学習なのだと感じ、改めて学校教育の場にはその視点を今まで以上に組み込んでいきたいと思います。
- ・このようなプログラムを知ることで自分の引き出しにもなりますし、もっと大きな意味で生徒に対して伝えることはもちろん、自分の子どもにも伝えることができそうだなと感じました。
- ・児童・生徒に伝えていくときには、それぞれの実態がありますし、私のように感じる子どもたちだけではないと思うのでやり方は考えなければなりません、同じように体験して身近に感じ、学ぶ意欲を高め、未来の知識を身につける実践をしていきたいと思います。
- ・知識と体験学習が組み合わせることで、塑像力が働くので印象深い学習になりました。
- ・身近な素材を使うという視点は大切だと思いました。さらに活動が伴うことで子供たちの興味・関心を引き付けられること間違いなしと思いました。
- ・楽しいゲームから始まりましたが、実は大切なことを学ぶプログラムだと思います。実践者が1つ1つ納得しながら活動を進められる点もこの良さだと思いました。
- ・指導する側の意図次第で、いろんな方向へ学習を広げていくことも可能ですし、子どもたち自身が学習を深めていくこともできると思いました。
- ・体験学習、まずはやってみて、考えて、学んで、またやってみて・・・やっぱり楽しいですね。

【資料3】 受講者による授業案（試験問題）

- ・私の勤務先は林業のまちで、教材で使用する間伐材を町内で産出されるものとし、それを上手く活用することで森林資源の有効活用に気付かせることができる。また森林の育成や町有林の保全など地元機関と連携・協力ができれば、植林や間伐の体験も可能であると思う。体験活動に地域素材を生かすことは、子どもたちが自分の住んでいる街にあるものに対して、興味や関心を引くきっかけとなり、技術科の学習を通じて、自然環境のこと、しいては「持続可能な社会」を実現していこうとする意識を高められればと思っている。
- ・理科を担当し、学校の周りの草花を育てているので植物に触れる機会が多い。子どもたちも外に出ることを楽しみにしているが、一方で自分の知識不足から教科書の実験だけを教室だけでやっていることも多かったと反省している。今後には生かせるものとして4点考えた。①学校の周りの花の花粉コンテスト、②風を感じる授業、③受粉の仕組みを探る授業、④教室に教材を「持ち込む」授業（児童の移動の時間を節約できる）である。こうしたことを考えながら「身近にあるもの」をより有効に、楽しく利用できないか、私自身の感度を磨いていきたい。
- ・授業でやったように子どもたちにも「アイスブレイク」や「グループワーク」を実施し、仲間意識

や自己有用感を持たせる、一緒に活動して楽しいと感じさせることが他者理解にもつながると思いました。グループワークで実施した「ブレインストーミング」が効果的で、自由に思いつくままに書き、しかも受け入れてもらえる体験は嬉しい。最後に感想や意見を交流し合うことも他者理解につながると思う。

- ・小学校の生活科の授業で行う「アサガオ」の栽培や、公園、草、虫を探しに行く授業で今回の講習と同じようなものを実施してみたいと思いました。授業で、臭いや手の感触を生かした授業を実施したいと思いました。
- ・私は2つ考えました。学校の立地するところには自然環境がたくさんあるので、その自然を活用した「秘密基地づくり」を実施したいです。もう1つは「おいしい水の食べ方」で、水以外にも「氷」を利用したり、(運動後など) どういう状況で水を飲むとおいしいのか、この水はどこで作られ、いつから人は利用するようになったのか、など水と氷を関係付けた授業をしてみたいと思いました。
- ・私は特別支援学級を担当しているので、ここにいる子供たちにも「五感」をどのように働かせる授業ができるのかを考えてみました。たくさんの自然に触れさせたいと思います。また学校の裏山にはスズメバチなどの危険があり行ってはいけないことになっていますが、自然体験を逆手に取り安全指導にも活用していけたらなと思っています。
- ・今日の授業でやった「木」に関する授業を私なりに発展させてみたいです。例えば「自分の好きな木」を見つけてもらい、臭い、肌触り、根の感じ、さらには「その木はいくつ?」、木に登ったらどんな景色かな? など身近な遊びとして授業に組み込んでいきたいです。
- ・散歩や外遊びをしたときに、面白い木や実など見つけそれを使って組み合わせて、制作やごっこ遊びを楽しむ。
- ・葉っぱ探しや、散歩の時間にも実際に木や花に触れる時間を作りたい。授業で紹介された「色遊び」なんかも取り入れていきたい。
- ・私は商業化なので自然とビジネスの関係を考えていきたい。例えば、自然を資源として捉え、身の回りの自然物からどのように製品を開発し、安定した翔米へつなげていくかということを取り入れてみたい。製品化と同時に「保護」の視点も身に着けさせたい。原料は実際に山へ取りに行き、自然と触れ合う体験学習や専門の講師の先生の指導を受ける時間を取り入れ、知識と体験学習のバランスを考えた年間計画を立ててみたい。
- ・私は英語の担当ですが、「比較級」の授業などで実際に外に出て、生徒にペアワークをさせたり、グループワークに「自然」を取り入れていくことができると思いました。いつも教室でやる科目なので、たまにはこういう授業も斬新なのではないかと思えます。
- ・私はこども園に勤務していますが、砂遊びに水を入れ、泥遊びをさせたり、ペットボトルなどの廃材を利用した遊びを考えてみたいともいます。登下校がほとんど車なので、雨の日に外に出てみたり、感じたり、時にはなめてみたり、水たまりの中に入る遊びを体験してみたいです。
- ・散歩などでよく目にする「地域のキレイな花畑」などと協力してお話をしてもらったり、冬の活動でヨーグルトやゼリーのカップに水を入れて氷になる様子を観察したり、実際に氷に触る体験をさせてみたい。
- ・学校の近くにある林や川を使った体験活動を実施したり、雪を活用した体験活動を行ってみたい。

実際には雪像づくりや、風を利用した凧揚げ、アイスクリーム作りなどに取り組んでみたい。

- ・私の幼稚園では、もともと自然の中で過ごす行事を多く取り入れているが、子どもがダニに食われるということがあり、その対策が悩みの種です。自然の中で単に過ごすだけではなく、今日の講習で教わったように「遊び」や「ふりかえり」の時間を大切にしていきたいです。
- ・「遠足」などの行事は、ただ歩いて、お弁当をたべて終わる風潮が強いですが、こうした外に行く機会を大切に、仲間同士で「磯ガニ探し」や他の生き物を探したり、それを活用して秘密基地をつくらせるワークを取り入れていきたいです。
- ・国語の授業では、物語文や詩などに出てくる植物を創造し、学校近くの草や木から探してみたり、なぜその木なのかを心象、五感からイメージさせて説明させたい。
- ・「俳句」の授業で、自分なりの俳句を作らせる。その際、俳句には「季語」が必要なので、自分はどの季語にするのか、その理由は何かなど「季語」を理解し、季節感のある俳句を創作することができたかどうかなどを見てみたい。
- ・私は数学教員であるが、「体験」という視点を意識した授業を取り入れたい。例えば一次関数の授業では、線香の長さが時間とともに短くなること、2次関数ではボール投げと放物線の関係性を考えさせたい。学活などの時間には「かまくらづくり」をさせ、仲間との共同作業の時間を作りたい。
- ・グループワークや水、自然に対する体験をホームルームや他校の生徒との交流の中で、短時間で仲良くなれる方法として活用していきたいと思った。自由がある程度利く授業の中で、自然や体験を大いに取り入れていきたい。
- ・美術の教諭です。外で風景がを描く時間は多いものの、実際に手で触ったり、耳を澄ませたり、臭いを感じたり・・・今日の授業でやったことを少し取り入れるだけで子どもたちの書く絵の雰囲気が大きく変わるのではないかと思いました。また海岸へ行って貝殻アートなども面白いと思いました。
- ・宿泊学習、学級レクなどで自然を感じたり、触れられるワークを取り入れていきたい。
- ・本講習を受け、自然体験、体験学習に対する考え方が変わった。具体的には自分が今までやっていたものに、さらに工夫を加えることで自然体験、体験活動に変わるのだと確信した。例えば森林組合の人に講義をしてもらっていたが、単発のものに終わらせるのではなく、事前、事後に木に触れてみたり、観察したり、疑問を持たせたり・・・こうしたちょっとした「工夫」が大切であることが分かった。
- ・みんなで拾ったどんぐり、松ぼっくりなどの自然を活用して、お店屋さんごっこやゲーム、レクの景品に使ったりするのが良いと思いました。
- ・安全面への配慮が必要ですが、穏やかな海ときと時化た海の体験などを考えていきたい。海のある地域に暮らしながら、一年を通して海や海に関することを一度も教えていないのが現状です。水の事故もありますが、楽しいこと、危険なこと、この両者を伝えていく必要があると思います。
- ・普段、工作をするときは必ず室内で行うので、クレヨン、マジック、ボード、折り紙などを持って山や川に行き、太陽の下でやってみる。石、葉や木などを活用した工作をさせてみたい。
- ・雪像づくりを年に2回行い、雪質の違いと気温の違いを理解させたり、四季を通じて体験したことを俳句にさせたり、採った植物で調理したり、解剖したり・・・もっと身近にあるものを活用した

授業を展開していきたい。

- ・高山植物に関する授業を行っているものの、一般的な草本類のことについて近くに生えている木なども体験的に学ばせる必要がある。同時にNPOや公的機関と連携し、関連する内容の専門家に体験的な自然の学習を行うなど外部との連携も大切であると感じた。知識だけではなく経験を伴った人材の育成に努めていきたい。
- ・私は現在教員でないので（専業主婦）、地域で自然をどのように活用するのか、特に自分の子どもに対しての場合で考えてみました。ただ何気なく遊ぶのではなく、草木をじっくり見たり、触ったり、五感を使って子どもと一緒に楽しみたいと強く思いました。家の前には草花があるので、今回教えて頂いた直接体験を子どもと一緒に楽しみたいと思います。

【資料4】

教員免許状更新講習 フォローアップアンケート

※このアンケートは、今後、本学で行う教員免許状更新講習運営の参考にするため、行うものです。

※回答は任意ですが、ぜひご協力ください。

1. 講習の内容について

◆1-1 講習全体を通し、面白いと感じた講習内容などがあれば、その点を教えてください。

・必修講習

・選択講習

◆1-2 講習全体を通し、講習内容について何か意見があればお書きください。

・必修講習

・選択講習

2. 講習内容以外のことについて

事務手続き、講習の感想など、ご自由におかきください。

●Title

Deployment of "teacher's license renewal training" in collaboration with local professional
~Search for the teaching practice incorporating "natural experience activities"~

●Abstract

In the current education, importance of "hands-on activities" and "direct experience" of children, the importance of "Cooperation of the School and the Community Education" has been declared by the school, home and regions. Therefore, the authors conducted a search for teaching practice incorporating the "nature experience activities" in the "teacher's license renewal training".

This paper is aimed to be comprehensively considered the class which "creation of classes that utilize the "familiar things" in Hokkaido ~class deployment incorporating "experience activities"~ was carried out by the authors in 2014. As a result, in cooperation with nature experience school and university profession, while taking advantage of each of expertise, it was possible to provide a combination of theory and practice programs that respond to the education needs

●Keywords

natural experience, experience activities, teacher's license renewal training, private educational institutions, cooperation of the school and the community education